

(前文略)

或る雨の訪問の日、こんな天気の際は混乱されることが多く、ふらりと出かける施設も近くにはないことを考えあわせ乍ら、勢いよく「こんにちは」と尋ねた。玄関に入るなり目に飛び込んできたのは、卓上に活けられた二本のバラ。見事に花開いて、私は驚きの声をあげた。たしか一週間前は固い蕾だった筈なのに…問いかける私に彼女は毎日水を取り替えほんの少しづつ茎を切るのだと話された。なるほど思いをかけて丹念に作業する…ということはこういうことなのかと、彼女の人柄をゆかしく感じられる一日を過ごした。

春うらゝで書き出された頁は、散歩中に見つけた梅の花を二人で愛でながら、昔三味線を教えていらした記憶の糸をたぐり寄せ、私の知っている「黒田節」から始まって、彼女の「梅にも春」にたどりついたときのことである。「この踊りと唄には、待ち焦がれる艶っぽさがないといけないのよ」と、年を重ねた指先をしなやかにくねらせて唄いながらふりを付けられる。何時もお嫁に行くことを夢見ておられる彼女、「うん、この色っぽさ放っておく男はいない」なんて「クスン」と笑ってしまった。

しかし、勿論こんな日ばかり続いた訳ではない。能面のような顔をして自分の世界に入って仕舞われたときなどは、冗談ばかり言って彼女の笑顔を取り戻すのに時間を費やす。何回かの徘徊にも出会った。訪問した時はもう姿が見えず、パトカーのサイレン救急車の音に胸をドキドキさせつつ待つものの、一向に手がかりすらない。何処へ向かって旅をしておられるのだろう。夜8時

35分、昭島警察に保護されている旨の連絡を息子さんが受ける。拝島まで歩かれた顔には憔悴の色と声の掠れが見られたが、二人の顔を見るなり安堵されたのか「おばさん元気だね」とさかんにおしゃべりをされた。

市内の方に保護していただいたときは、事業団の職員さんと二人でいるときに連絡を受けた。地理にくわしい私が先導して車で現地に向かう。たどり着くなり私の顔を見て、涙をこぼしながら胸にとび込んでこられた。私は職員さんをお願いして一先ず彼女を連れ帰り、温めた牛乳と芋粥で落ち着いていただく。私の家の近隣に徘徊されることも幾度かあるが、社会で抱える事柄として普段から彼女との関係を見せることによって、無事保護することができた。

こうした出来事と出会いの中で、痴呆老人と呼ぶにはとても残念な気がする程多くのことを学んだ。そして徘徊、家事能力のない年寄りだなどの都合のいい言い訳があっても、成育歴、生活歴の中できちんと人生を生きたか、人間をやったかを垣間見せていただいたことの幸せも…。

只、電燈をつけたらサツ(警察)に連れていかれるとか、このお金は政府の許可が無いと使えないなどの戦争中の悲しい記憶の混乱を消せる消しゴムがあったら、私は彼女に送りたいと願っている。

